

キャリアガイダンスセミナー2020
「今こそ考える 『これからの授業づくり、学校づくり』」

授業づくりの深み

—教師主導と学習者主体の二項対立
を超えて「教科する」授業へ—

石井英真

2020年10月25日（日）

（オンライン開催）

自己紹介

石井 英真

京都大学大学院教育学研究科 准教授

- ・教育学博士（京都大学）
- ・学校で保障すべき学力の中身とその形成の方法論について理論的・実践的に研究。

◆近著

『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン—』（日本標準）

『再増補版 現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計—』（東信堂）

『授業づくりの深め方—「よい授業」をデザインするための5つのツボ—』（ミネルヴァ書房）

『高等学校 真正（ホンモノ）の学び 授業の深み（仮）』（学事出版、近刊）など

現代アメリカにおける
学力形成論の展開 **再増補版**

スタンダードに基づくカリキュラムの設計

Development of theories on educational objectives and assessment
in the United States:
Designing standards-based curriculum

石井 英真

Gov. Task. Structure Art&Technology Assessment

授業づくりの
深め方

「よい授業」をデザインするための5つのツボ

石井英真 著

ミネルヴァ書房

未来の学校

ポスト・コロナの公教育のリデザイン

教育機能や保護機能等において「大きな学校」を追求
すること。公共性と公平性の実現のためにふんばること。
委縮と不信の連鎖から挑戦と信頼の連鎖へ――

苦境に立ってきた公立学校こそ、
「眠れる獅子」の
ような可能性を
秘めている！（本書より）

石井英真

日本図書

ゼロから学べる
オンライン
学習

石井 英真 監修
秋山 貴俊 編著
長瀬 拓也

明日図鑑

流行に踊る

石井英真、渡辺貴裕、熊井将太、巨理陽一、川地亜弥子、木村拓也、藤本和久、杉田浩崇、赤木和重、山下晃一

教育の内外から次々と押し寄せる「改革」という名の「流行」の渦から
くれば、教師の背中を後押しし、子どもが成長できる学びを生み出せるか？

本当に大切なことは、私たちの足元にある！

教育の内外から次々と押し寄せる「改革」という名の「流行」の渦から
くれば、教師の背中を後押しし、子どもが成長できる学びを生み出せるか？

STEAM
EdTech
EdTech

日本の教育

改革を扇動する言葉に踊らされず、
安易な批判や復古趣味に陥ることなく、
未来志向で
地に足のついた
教育のもつ
真の力を再考する！

東洋館
出版社

なぜいま「授業」を問うのか？

コロナ禍が投げかけているもの

- コロナ禍で新たに課題が発生したというより、これまでの授業や学校の課題が顕在化している。
- オンライン学習で問われているのは、テクノロジーの質以上に、授業観である。
 - = 「授業を進める ≠ 学びを保障する」「授業を届ける ≠ 学びを支援する」、学習者目線で考えられているか？ 形だけのアクティブ・ラーニングであったことのもろさ。
 - ドリル的な課題を渡し音沙汰がない、動画を作っても、演出入りの解説的なもの。
 - オンライン授業も、大規模化した講義で進め、生徒たちが席についているかを監視しながら、結果をテストで点検する。

改革に踊り、揺れる「授業」 二項対立の裏で進む手法主義

- 「教え」から「学び」へ（教師主導から学習者主体へ）、さらには、「授業」から「学び」へ（学校から合校へ）？
- 「一斉授業」から「学び合い」へ、さらには、「個別最適化された学び」へ？
- ゆらぐ「授業」、進む手法主義（○○メソッドから○○アプリへ）

※「学び」の強調は「教えること」を照らし出し、個別化の強調は、集団での学びの意味を照らし出す→「授業」が問われる。

「旧来型の授業」という語りで見落とされているもの

- 日本の伝統的なよい授業のイメージである、クラス全体での創造的な一斉授業は、つまずきを生かしたりしつつ、一人一人の考えをつないだりゆさぶったりして思考を練り上げていく質の高さをめざしてはいるが、子どものつぶやきにアシストされながら、教師が想定する流れや結論を押し付ける授業になりがち。
- 新しい時代のよい授業とみなされがちな学び合いの授業は、学習者が主人公の生き生きとした姿や、アイデアの創発をめざしてはいるが、学びを深める指導もなく、学習のめあてと手順を示して子どもを動かすだけの授業になりがち。
- 「（演習問題を）解く、進める」ことに重きを置く塾的な勉強文化が学校にも影響を与えるようになり、それが「理解すること」や「考える」ことだと生徒たちは誤認し、学校も「立ち止まり」や「回り道」という理解や思考に誘う強みと矜持を見失ってはいないか。

「学び」「自走」「学びの責任」の強調の落とし穴

- 生徒の学びへの注目は、教えっぱなしにしないという、学びを保障する教師の責任の先に意識化される。一方でそれは、言葉だけが独り歩きすると、学びを保障する教師の責任の放棄（「授業からの逃走」など）、生徒の自己責任論に陥る危険性がある。
- 「主体性」は、生活（生きること）への主体性、社会への責任として捉えられてこそ、未来社会を切り拓く学びになる。一方で、それは自習する力のように、学習（勉強）への主体性（大人にとって都合のよい主体性）に矮小化されていないか。
- 「学び」の強調の中に混在する「矜持」と「逃げ」の両面の存在を見極めることが重要。
- 教科における文化へのこだわり、教えることと学ぶことの緊張関係と向き合う経験があっても、**「探究」**は、教師の教育観をゆさぶる教師の成長の場として機能し、生徒の人的成長につながる学びの質をもたらす。この点の自覚が薄いと、**「部活」**が外注されたのちに、授業に向き合わずに、部活の代わりにごっこの**「探究」**に逃げる教師を生み出すかもしれない。

休講期間中に見えてきた学校の当たり前を問い直す視点： 「小さな学校」と「大きな学校」の間

- ICT活用、修得主義、個別最適化された学び、働き方改革、これらは「学校のスリム化」を招きがち。学校の丸抱え体質は問題だが、捨てるてはいけないものを見極める必要がある（生活の場としての学校、成長につながる学びの保障）。
- 「オンライン学習」は、「授業」と「自学」の間の「遠隔学習機能」の増設問題として捉える。学校という場におけるフレックスな学習の時間（ドリル的な勉強は授業というよりも寺子屋的にやれる）、家庭における支援付き自学（オンラインで仲間や学校や社会とつながりながら）というオプション。授業の自習化、自習の授業化といった発想で、学校内外ともに「授業漬け」（一斉授業と宿題）にされて一つの問題で立ち止まる余裕もなくなっていた子どもたちに対して、学びの時間を確保する（大学における単位の実質化の発想に学ぶ）。
- 単位数の削減、「学校半日制」的な発想も出てきている中、かつての「週二日制」が子どもたちにゆとりをもたらしたのかどうかの検証の上に、学校の在り方を考えていく必要がある。高校段階なら、授業以外に、フレックスな時間を設けて学びの時間を増やすことは考えられる。しかしそれは、「大きな修得主義」（総合的で挑戦的な課題への取り組み）を前提にしないと、勉強を進めることに終始するだろう。「自習室」（個別化・早修・寺子屋的）よりも「自主ゼミ」（個性化・拡充・大学的）の文化を育てていく。

教育課程の履修原理—履修主義と修得主義—

		履修主義・年齢主義	修得主義・課程主義
履修原理		履修主義： 所定の教育課程を、その能力（または心身の状況）に応じて、一定年限の間、履修すればよい。	修得主義： 所定の課程を履修して、目標に関して一定の成果を上げることが求められる。
進級（卒業）原理		年数（年齢）主義（social promotion）： 卒業要件として一定年限の在学を要求し、grade は、「在学年数（学年）」を意味する。	課程主義（merit promotion）： 卒業要件として一定の課程の修了を要求し、grade は、「教材習得の段階（等級）」を意味する。原級留置（留年）もありうる。
学校の中心的な役割		社会性・人格の育成、全面発達（多元的価値）、保護（ケア）・社会的包摂機能 共同体としての生活集団を軸とした機関	知識・技能の獲得、知的発達（一元的価値）、能力向上・水準保障機能 機能的で学習集団を軸とした機関
カリキュラム論上の立場	義務教育制度成立期	経験主義（子どものニーズに準拠）との親和性 方向目標と相対評価や個人内評価（構造化されていないカリキュラム） 同じ年齢集団で（個々の子どものニーズに合わせて異なる内容や進級基準もありうる）	系統主義（目標・内容に準拠）との親和性 到達目標と目標準拠評価（構造化されたカリキュラム） 同じ内容を（内容の習熟度に合わせて異なる年齢の子どもたちが集まることもありうる）
	現代	系統主義の学力保障と平等化の側面との親和性	経験主義の個性尊重と自由化の側面との親和性

学びの個別化と個性化

	個別化	個性化
基本的な方向性	<p>教育内容や学習進度や進級水準の能力に応じた多様化</p> <p>「指導の個別化」（子どもの個性（適性）に応じて学習方法の最適化を図ることで、教科の学習内容の中で習得させたい知識・技能の確実な定着をめざす）</p>	<p>ひとりひとり（individual）の内的なニーズや自発性に応じた多様化</p> <p>「学習の個性化」（子どもの興味・関心を生かしながら、教科の目標に迫るような思考・判断や認識を深めたり、社会の中で自己を活かせるような「生きる力」を高め、個性を育てたりしようとする）</p>
個人差の捉え方	学習にかかる時間の差（量的差異）	興味・関心や学習スタイルなどの差（質的差異）
教育形態・システムレベル	<p>既存の内容パッケージの量や水準の違い</p> <p>能力別学級編成（同一性）、自由進度学習</p>	<p>その子に応じた内容自体の組み換え</p> <p>同年齢集団、異年齢集団等の多様な集団編成（複数性）、自由テーマ学習</p>
指導法レベル	学習進度や学習到達度に応じて個別指導を行う	その子に応じて教授法や学習活動や表現方法を工夫する
評価とカリキュラムのあり方	<p>知能や学業成績等の一元的尺度</p> <p>（量的に進める直線的）プログラム学習と目標標準拠評価</p>	<p>多重知能や個性（持ち味や強み）等の多元的尺度</p> <p>（質的に深める多面的な）プロジェクト学習と個人内評価</p>
発展学習の形態	早修（acceleration）（より早く進む）	拡充（enrichment）（より広く深く学ぶ）

いま改めて確認すべき授業づくり の方向性とは？

教科の本質的かつおいしい部分を生徒たちは味わえているか？

生徒たちは教材・文化と出会えているか、没入できているか？

学ぶことで生徒たちは生きることや生活で立ち止まれているか？

折に触れて、力を発揮できる「舞台（見せ場）」は設定されているか？

本物の学びとは？

- 第四次産業革命期ともいわれる、変化の激しい現代社会、労働者として、また、生活者や市民として、さまざまな文脈で他者と協働しながら「正解のない問題」に対応する力や、生涯にわたって学び続ける力など、高度な知的・社会的能力が必要とされてきている。
- ドリブルやシュートの練習（ドリル）がうまいからといってバスケットの試合（ゲーム）で上手にプレイできるとは限らない。ゲームで活躍できるかどうかは、刻々と変化する試合の流れ（本物の状況）の中でチャンスをもつにできるかどうかにかかっており、そうした感覚や能力は実際にゲームする中で可視化され、育てられていく。ところが、従来の学校において、子どもたちはドリルばかりして、ゲーム（学校外や将来の生活で遭遇する本物の活動）を知らずに学校を去ることになってしまっている。
 - 「真正の（本物の）学習（authentic learning）」の必要性。

教科の一番おいしいプロセスを子どもたちにゆだねる「教科する（do a subject）」授業へ

学校での学習の課題

- 人間の有能性は文脈によって大きく規定されるが、学校での学習の文脈があまりに不自然で、生活文脈とのつながりがみえないために、子どもたちの本来の可能性や有能性が発揮できていないことがあるのではないか。
- 「回り道」があっても「もどり」がないために、「回り道」の強みを生かしきれず、生きて働かない学力となっている。
- 文化は有能性よりも遊びに関わる。しかし、学校や学校外の勉強は、文化を遊ばず、味わわずに、それを筋トレや選別の道具として使ってはいないか（例：美味しい料理を味わわずに、早食い大食いを強いられているうちに、それが自己目的化してしまう）。思考の体力づくりは大事だが、筋トレのための筋トレは、受験というゲームで勝ち抜くためだけの学力となり、成長の伸び代をつぶすことになりかねない。

「本物の学び」に込めた意味

- 「本物＝実用」ではない。「本物」とは、教育的に（時に嘘くさく）加工される前の、現実のリアルや文化の厚みにふれることを意味する。
- わかっているつもりは、現実世界の複雑さから、また、できているつもりは、その文化や領域の追究の厚みからゆさぶられることで、教科の知と学びは血が通ったものになっていく。
- 「学問のにおい、ホンモノのにおいのする授業」（それによって、生徒の目を学問の世界や現実の世の中へと開かせていく）をする先生、そんな実践を志向する文化を生かしながら、そうした人間的成長にもつながる人間臭い質の高い学びをすべての子どもたちに保障したい。
- 質の高い本物の学びを経験することを通して、現実や社会への関心が広がり、視座が上がることで、社会が求めるコンピテンシーや進路実現で大事になる受験学力にもつながる。

教科における本物の学びとしての「教科する」授業とは

- 「教科の内容を学ぶ (learn about a subject)」授業と対比されるものの、「教科する (do a subject)」授業とは、知識・技能が実生活で生かされている場面や、その領域の専門家が知を探究する過程を追体験し、「教科の本質」をともに「深め合う」授業である。
- 「教科する」授業は、教科の本質的かつ一番おいしい部分を子どもたちに保障していくことをめざした、教科学習本来の魅力や可能性、特にこれまでの教科学習であまり光の当てられてこなかったそれ（教科内容の眼鏡としての意味、教科の本質的なプロセスの面白さ）の追求でもある。
- 本物の活動のプロセスを味わうなかで、活動の骨組みとなる能力の要素を育成し、自己と自己をとりまく世界とのつながりを編み直し、世界への関心を広げるような、認知的に高次であるだけでなく、認識に深さや重さを伴う学びをめざす。
- 教師と子どもの垂直的な教え込み関係でも、子ども同士の水平的な学び合い関係でもない、教師と子どもがともに教材と向かい合い、学び手として競り合うナナメの関係構築する。

「教科する」授業を創る上での三つの問い

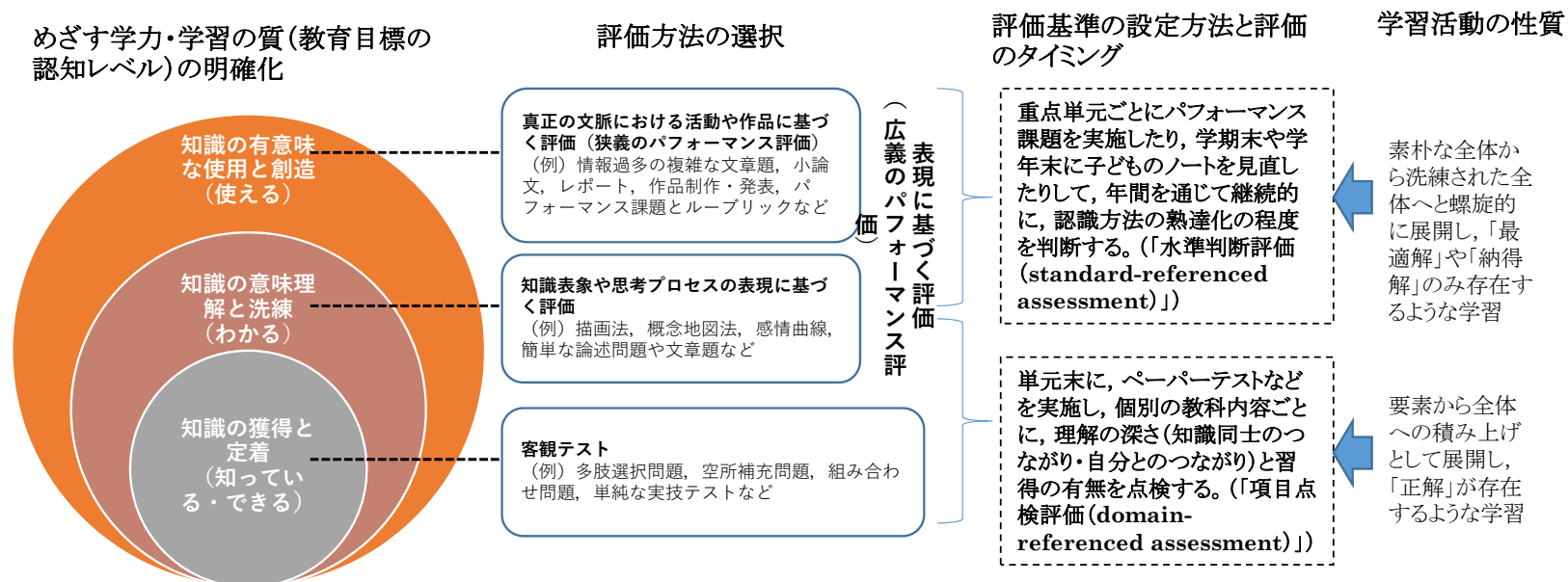
- 本時や単元の「ねらい」の先に、目の前の生徒たちの人間的成長への「ねがい」をみすえているか？
= 「ねがい」から教科の当たり前も問い直す。
- 「知っている・できる」、「わかる」を超えた「本物」を経験する学習活動（問いや課題）を生徒たちに保障できているか？
= 学力を二層ではなく三層で捉えて、「使える」レベルの学力を意識した学習活動をデザインする。
- 生徒が教科書的な正答や教師を忖度する関係を超えて、しっかりと教材や文化と向かい合っているか？
= 教え込み（タテ関係）でも、学び合い（ヨコ関係）でもない、教師と生徒が競る関係（ナメ関係）を構築する。

※【定着への手立ての埋め込み】知識の量と幅やその定着という点からは、知識の吸い上げ（教科書をも資料の一つとして、それらをめぐることを大事にする）、協働と個の往還（グループでみんなで充実した学びをしたのであれば、そこでの議論を整理・総合しつつ、その思考の道筋を個人で静かにたどり直して自分のものとすることも大事にする）

学力・学習の質的レベルに対応した各教科の課題例

	国語	社会	数学	理科	英語
「知っている・できる」レベルの課題	漢字を読み書きする。 文章中の指示語の指す内容を答える。	歴史上の人名や出来事を答える。 地形図を読み取る。	図形の名称を答える。 計算問題を解く。	酸素、二酸化炭素などの化学記号を答える。 計器の目盛りを読む。	単語を読み書きする。 文法事項を覚える。 定型的なやり取りができる。
「わかる」レベルの課題	論説文の段落同士の関係や主題を読み取る。 物語文の登場人物の心情をテキストの記述から想像する。	扇状地に果樹園が多い理由を説明する。 もし立法、行政、司法の三権が分立していなければ、どのような問題が起こるか予想する。	平行四辺形、台形、ひし形などの相互関係を図示する。 三平方の定理の適応問題を解き、その解き方を説明する。	燃えているろうそくを集気びんの中に入れると炎がどうなるか予想し、そこで起こっている変化を絵で説明する。	教科書の本文で書かれている内容が把握でき、訳せる。 設定された場面で、定型的な表現などを使って簡単な会話ができる。
「使える」レベルの課題	特定の問題についての意見の異なる文章を読み比べ、それらをふまえながら自分の考えを論説文にまとめる。 そして、それをグループで相互に検討し合う。	歴史上の出来事について、その経緯とさまざまな立場の声を紹介し、その意味を論評する歴史新聞を作成する。 ハンバーガー店の店長になったつもりで、駅前はどこに出店すべきかを考えて、企画書にまとめる。	ある年の年末ジャンボ宝くじの当せん金と、1千万本当たりの当せん本数をもとに、この宝くじの当せん金の期待値を求める。 教科書の問題の条件をいろいろと変えて発展的に問題をつくり、追究の過程と結果を数学新聞にまとめる。	クラスでバーベキューをするのに一斗缶をコンロにして火を起こそうとしているが、うまく燃え続けられない。その理由を考えて、燃え続けるためにどうすればよいかを提案する。	まとまった英文を読んでポイントをつかみ、それに関する意見を英語で書いたり、クラスメートとディスカッションしたりする。 外国映画の一幕をグループで分担して演じ、発表会を行う。

学力・学習の質と評価方法との対応関係

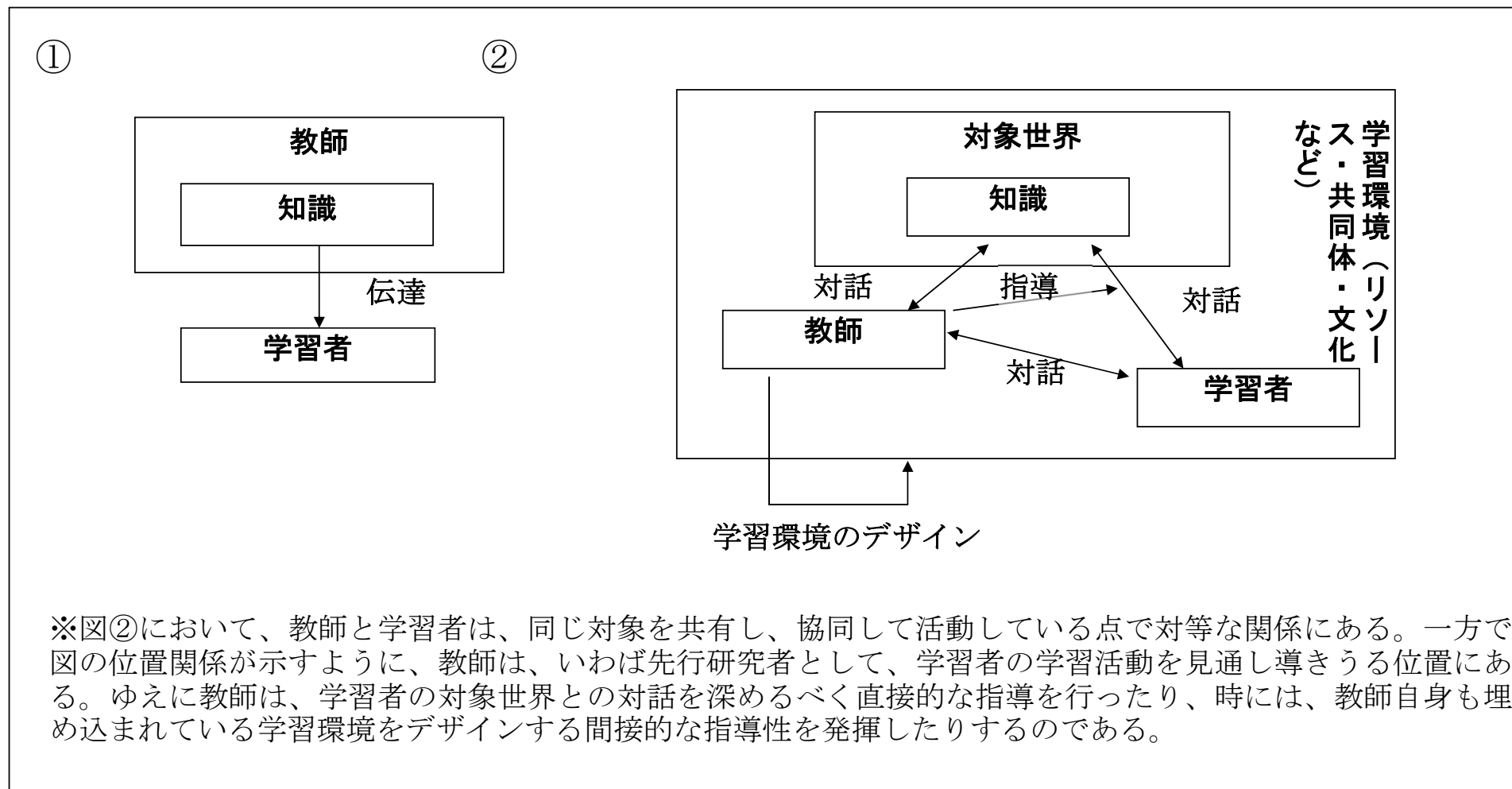


(出典:石井英真「学力向上」篠原清昭編著『学校改善マネジメント』ミネルヴァ書房、2012年。)

「考える力を育てるかどうか」という問い方ではなく、「どのレベルの考える力を育てるのか」という発想で考えていかねばならない。特に、内容の習得をめざす中での思考力と、学んだことをつなぎあわせて文脈に対応して使われる思考力とのレベルの違いを認識しておく必要がある。

c. f. ブルームの目標分類学における、「適用 (application)」 (特定の解法を適用すればうまく解決できる課題) と「総合 (synthesis)」 (論文を書いたり、企画書をまとめたりと、これを使えばうまくいくという明確な解法のない課題に対して、学んだ知識を総動員して取り組まねばならない課題) という「問題解決」のレベルの違い。

図. 「真正の学習」における教室の関係構造（出典：石井英真『現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2011年、183頁。）



日本の伝統的な授業像の発展的継承

日本の伝統的な「教科内容を豊かに学ぶ」授業像	「教科する」授業の提起する授業像
教師に導かれた創造的な一斉授業（練り上げ型授業）による知識発見学習	子ども同士の創発的コミュニケーションによる知識構築学習
導入が豊かすぎる、「わたり」があって「もどり」のない、「尻すぼみ」の単元展開（科学的概念としての知識）	出口が豊かで「もどり」（生活への埋め戻し）がある、「末広がり」の単元展開（現実世界を読み解く眼鏡（見方・考え方）としての知識）
名人芸的な教師のアートと強い学級集団に依拠する授業	学びの場づくり（課題、学習形態、教具・メディア、時間や空間のアレンジ）とゆるやかなコミュニティで、学びを触発する授業
教科書で教える授業、一時間の終わりにすっきりわかる授業（内容の本質性）	（複数教科の）教科書を資料にして学ぶ授業、もやもやするけど楽しい授業（プロセスの本質性）
つまずきを教師が生かす授業	つまずきを子ども自身が生かす授業
「強いつながり（コミュニティ感覚）」と硬くて重いコミュニケーション・大文字の自己、長いスパンで大きな物語で人生の意味を捉える心性、垂直的に体系化された共通の客観的真理という基盤	「弱いつながり」とコミュニケーション・アイデンティティ・知のソフト化・多元化、いまここの生を楽しむ心性と思考や集中力のスパンの短さ、水平的にネットワーク化され局所的に当事者によってつくられるものとしての知識、子どもたちの生活感覚や学び感覚の変化（居酒屋談義からカフェ的な語らいの形へ）

教科における本物の学びのイメージ①

	数学（立命館宇治中学校・高等学校・酒井淳平先生）	国語（神奈川県立横浜翠嵐高等学校・笠原美保子先生）	英語（元京都府立園部高等学校・田中容子先生）
ねがいの意識 人間的成長へ	「生徒が変わる授業」（「数学」「自分」「学ぶこと」への見方が変わる）	古典を学ぶ意味は、「物語」のストックを増やすこと	英語で書かれたテキストを読み取り、英語で自己表現と応答ができること
学力の三層構造 総合やもどりに よる深く重い 学びへ	自分で収集したデータを確定・検定する課題学習（アンパンマンがパンチを繰り出すまでの時間など）に取り組み、内容の理解と定着も図る。	『史記』の「鴻門の会」を、教科書に掲載されていない部分と教科書本文とを関連付けながら読み、グループで劇化し、読みを深める。	「キング牧師の演説」の読解・暗唱の後、自分のことで“I have a dream that・・・”を書く、という表現課題に取り組む。
脱正答主義 教師と生徒が競 る関係へ	教科書や解答を読み自分で理解することを大事にし、思考の言語化や学び合いを通して、公式や定理を自ら発見するものとして学ぶ。	劇化にあたり、心の中のセリフを補うなどすることで、資料を読み込んだうえで生じる解釈の違いを可視化し、それを互いに味わう。	語彙や英文を聞き取れないとき、Please repeatなどの要求を出すよう促し、英作文には必ず複数解答があると伝える。

（石井英真編著『高等学校 真正（ホンモノ）の学び 授業の深み（仮）』学事出版、近刊より）

教科における本物の学びのイメージ②

• 「学問する」ことと「実践する」こと

日々のあたり前に「なんで？」という疑問を突き付けて、仮説を立てて実験による検証したり、その法則を発見した科学者のプロセスを学んだりしながら、誤差の検討も含め、科学的な探究の過程を追体験する。他方で、「放射線」の性質と人体への影響について学ぶなど、社会の中で自ら判断したり行動したりすることにつながる。（大阪府立春日丘高等学校・吉新聖二先生）

• 仕掛けてゆだねること（創発）とホンモノでゆさぶること（矛盾）

「日本はどの国・地域と地域統合すればよいのだろうか」という単元を貫く問いを軸に学びを進め、単元の前と最後にこの同じ問いにグループ学習で取り組み、最終的にさまざまな地球的課題を関係構造図にまとめる。グループ学習に当たっては、教師が介入したり正答を示したりせず、緩やかに見守る。（神戸大学附属中等教育学校・高木優先生）

光市母子殺害事件をもとに「死刑制度の是非」について学び話し合うなど、教師自身がシビれた問題を生徒に投げかけ、教師自身の葛藤の過程を語り、生徒とともに問題を考えていく。答えのない問題について考える中で生徒たちから生まれた問いにさらに向き合うべく、被害者遺族・木村洋さんと直接対話する機会を持ち、生徒の本音を引き出し、静かな思考を生み出していく。（東京学芸大学附属高等学校・楊田龍明先生）

参考文献

- 石井英真『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影』日本標準、2015年。
- 石井英真監修・太田洋子・山下貴志編著『中学校「荒れ」克服10の戦略—本丸は授業改革にあった！』学事出版、2015年。
- 石井英真『中教審「答申」を読み解く』日本標準、2017年。
- 石井英真編『授業改善8つのアクション』東洋館出版社、2018年。
- 石井英真・西岡加名恵・田中耕治編『小学校 指導要録改訂のポイント』日本標準、2019年。
- 石井英真・熊本大学教育学部附属小学校『粘り強くともに学ぶ子どもを育てる』明治図書、2020年。
- 石井英真「教師に求められる学びとは—教師による教師の成長のための実践研究」大阪府教育センター『高等学校における校内授業実践研究進め方ガイドブック』2020年。（http://wwwc.osaka-c.ed.jp/category/forteacher/pdf/kounaijyugyoujissenkennkyuu_ver_3_r2.pdf）
- 石井英真『授業づくりの深め方』ミネルヴァ書房、2020年。
- 石井英真『再増補版・現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2020年。
- 石井英真『未来の学校—ポスト・コロナの公教育のリデザイン』日本標準、2020年。
- 石井英真監修・長瀬拓也・秋山貴俊編『ゼロから学べるオンライン学習』明治図書、近刊。
- 石井英真編著『流行に踊る日本の教育（仮）』東洋館出版社、近刊。
- 石井英真編著『高等学校 真正（ホンモノ）の学び 授業の深み（仮）』学事出版、近刊。
- With コロナの学校のあり方についての発信（<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>）